

# 盗賊騎士の回心と改革派修道院の成立： 『レラスのポンスの回心に関する論考と シルヴァネス修道院の始まりの真の物語』 試訳

北 館 佳 史

ここに訳出したのはユーグ・フランシジェナの『レラスのポンスの回心に関する論考とシルヴァネス修道院の始まりの真の物語』（以下『論考』）の全文である。南フランスのルエルグ地方のシルヴァネスの隠修士の共同体は新興のシトー修道会に1136年に編入されたが、『論考』はこの修道院の創建の事情と創建者レラスのポンスの生涯を内容としている。この中規模程度の修道院が多くの研究者の関心を集めてきたのは、この例外的な物語史料とカルチュレール<sup>1)</sup>の両者が伝来する恵まれた史料状況による。この史料は、経済的実態との関係<sup>2)</sup>、隠修士運動とシトー会<sup>3)</sup>、異端の出現への正統側の応答<sup>4)</sup>、騎士の宗教性と修道院改革<sup>5)</sup>などさまざまな観点から論じられており、分量的には短いものの、多様な分析を可能にする豊かな内容を備えている。

キーンズルの研究によれば、執筆状況は次のように考えられる。著者のユーグ・フランシジェナに関する情報はほとんどないが、写本中の同著者によるロデーヴ司教ゴスラン宛ての2通の書簡の文体や異端に関するやりとりなどから一定の学識を有する修道士であることが窺える。また、カルチュレールに見える証書作成係のマギステルのユーグが同一人物であるならば、1160年代に書記として活動していた人物になる。作成年代については、四代院長ポンス（レラスのポンスとは別人）への言及から在位期間

の1161年から71年に位置付けられる<sup>6)</sup>。私見によれば、1170年代初頭に完成するカルチュレールの作成と同時に進行した計画であり、この歴史編纂事業は院長ポンスの改革の一環をなしていた。すなわち急速な発展と繁栄の一方で内外の問題で動揺していた共同体の規律を引き締める目的をもって修道院の清貧の起源を称揚する物語が書かれたと考えられるのである。

『論考』は全体として三つの場面に分けられる。第一がポンスの回心と巡礼の場面で、街道の盗賊騎士であったポンスが回心し、家族を修道院に入れ、ロデーヴの広場で司教を前に公的に悔い改めをした後に全財産を放棄し、サンティアゴ巡礼を行う。第二は隠修士の集団としての活動で、地元の領主のアルノー・デュ・ポンの支援でシルヴァネスの荒れ野に定着し、周辺住民からの支持を受け、活発な慈善活動を行う様子が描かれる。そうした中で大飢饉が発生し、ポンスが貧者救済の演説を行い、食料増殖の奇跡が起こる場がこの物語のクライマックスをなしている。第三はシトー会修道院時代で、シトーかシャルトルーズかの論争が起こり、マザン修道院の指導を経てシトー会に正式加入し、手の労働と多くの寄進により修道院が成長し、繁栄する過程が語られる。ここで善行者の名前や寄贈額が具体的に記され、修道院が提供する執り成しの祈りに言及がなされる。また、助修士に留まったレラスのポンスの働きや多くの騎士が彼の模範に続いたことが記される。

この著作はジャンルの的には聖人伝と修道院創立史の中間的な性格を有している。ポンスは超自然的な力を欠く一方、雄弁の才能があり、戦士的なエートスを保ち、「肉体の強さ」で人々を物質的側面から支える存在として描かれる。『論考』の手稿は2点しか知られず、基本的には内部で朗読され、共同体の結束の維持・強化のために用いられ、崇敬はローカルな範囲に限られたと考えられる<sup>7)</sup>。内容的に特徴的なのは、霊的なものと物的なものとの絡み合いであり、施しによる富の循環や手の労働と寄進による財

の生産と集積の過程が詳細に描かれる。また、食べさせる／食べさせられる関係が立場を替えて繰り返し描かれ、中でも飢饉の際に地域民を食べさせた経験は共同体の歴史の中で特別な位置が与えられている。ここで重要なことは隠修士時代から共住修道制の時代まで共同体は社会から隔絶しておらず、救済のエコノミーの物語の中心の座を占め続けている点である。また、シトー会是一般には慈善活動で知られていないが、『論考』では地域民に対する慈善が現在に続く共同体の慣習として強調されていることが、編入された共同体のアイデンティティを窺わせる点で注目される。

翻訳の底本としてはディジョン市立図書館所蔵写本に基づくキーンズルの校訂版<sup>8)</sup>を使用し、散逸したシルヴァネス手稿の17世紀のコピー（Paris, B.N.F., fonds Doat, vol. 150, f. 1-23）に基づくバリュエズ版<sup>9)</sup>も併せて参照した。また、キーンズルによる英訳<sup>10)</sup>とドクサンによる仏訳<sup>11)</sup>を参照した。聖書の引用は『新共同訳聖書』に依るが、文脈に合わせて一部変更を加えた。

レラスのボンズの回心に関する論考とサルヴァネス修道院の始まりの真の物語が始まる。

不可分なる聖三位一体の、唯一の真実にしてこの上ない、永遠にして口にするのも恐れ多い神の、父と子と聖霊の御名において。私、すべての修道士の中で最も小さき兄弟のユークは、自らの知性の能力と執筆の才能の程度に応じて、我々の修道院、サルヴァネス修道院の始まりの時期を語るよう心がけ、いわば幼少の最初の揺籃期を思い起こすように努めた。そして、いかにして修道院がまるで善き乳母の熱意と熱心によるかのように、天の恩寵の配慮により雄々しく力強く成長したのか、いかにして神の保護により今日占めていると認められる地位に到達したのかを文書に記録しようとした。いつも小さなことから偉大なことを行った者、五つのパンで5000人を食べさせた者（マルコ 6:38-44; マタイ 14:17-21; ヨハネ 6: 0-13

参照), それどころか世界の始まりに無から万物を創造した者の名誉と栄光と賞賛のために。また, 未来の者たちの記憶のために, どのような, どれほど偉大な父たちによって我々の修道院の修道生活が始まったのかを後を継ぐ将来のすべての者が知るように。善い木のこの寛大な根が知られたならば, 彼らはその種に応じた実をつけるように努めるであろう。そして, この実は, この美しい木, すなわちサルヴァネスの母なる教会の証言と賞賛と名誉のために, 常に色あせることがないであろう。はじめから天上の農夫の手は低い茂みのように常にこの木の世話をしたが, 変わらずに世話し続け, 木を成長・発育させ, 天上の雨のように多くの恵みで水を与えている。念入りな配慮で森の他の木々の中であってその影が山を覆うほど高く育て上げた。そこではさまざまな徳の色で彩られた霊的な魂が, 巣作りをする天上の鳥のように, 善行というひな鳥を養い, 同時に自らの声で創造主の賞賛を絶えず響かせている。その陰で素直で柔和な者たちが, 神の善き群れのように肉の悪徳の熱から休息をとり続ける。詩篇が述べるように「あなたの民の群れをその地に住ませてくださった」のである(詩67:11)。

もし才能に乏しく, 弁に難があり, ほとんど学識のない私がこのような務めに取り組むことを非難する者がいたら, 私が無遠慮な厚かましさに導かれたり, 虚栄の風に煽られたりしているのではなく, 救いの服従の絆に縛られてこの作業を開始したことを知るように。我が院長のポンスが私にこれを命じたのであり, 彼自身がはじめから見たことや, その場で見た人々から聞いたことや, さらにこの場所の最初の創設者・創建者たちから聞いたことを示したのである。我々の兄弟の中にも証言をしてくれた者がいたが, 伝聞だけですべてを知っていた。我々の叙述は, はじめからすべてを知っており, 創健者たちの労苦と忍耐に加わっていた人々にいっそう依拠している。すなわち, 司祭のユークとレイモン・アルザラムであり, 彼らの証言の真実性を疑うことは誰にも許されない。以上に述べたことで序言

には十分であろう。

序言が終わる。

論考が始まる。

フィリップの息子のルイが統治し<sup>12)</sup>、司教ピエールがロデーヴ司教座を治め<sup>13)</sup>、我々の主であるイエス・キリストが天と地と海を支配した頃、ロデーヴ地方に一人の男がいた。騎士の身分でレラスのポンスという名を持ち、レラスは彼の難攻不落の城であった。世俗の価値によれば、生まれが高貴で、資力は豊か、財産に恵まれ、才能が鋭く、武勇に優れ、武事に専心し、都市で権勢が盛んで、あらゆる世俗的な栄光において際立ち、他に抜きん出ていた。若い頃には彼も世俗の欲望に従い、多くの隣人に迷惑をかけた。すなわち、狡猾な言葉で悩ませた人々もいれば、武装した暴力で苦しめた人々もいて、その財産からできるだけ多くのものを奪い、昼も夜も貪欲な行為に及んでいた。彼はこの悪徳で非常に有名だったが、他の点でも劣らずに非難されるべきだと思われていた。しかし、敬虔な神は罪人の死ではなく、贖罪を望まれ（エゼ 18:23, 33:11 参照）、「御自分が憐れみたいと思う者を憐れみ、頑なにしたいと思う者を頑なにされる」（ロマ 9:18）ので、彼の心を畏怖の槍で刺し、彼を以前の行いから完全に变えてしまわれた。正気を取り戻したとき、彼は自分が行った悪事に思いをめぐらし、そうした行為に差し迫っていた裁きのことを考え始め、内側で心の痛みに揺り動かされ、完全に悔い改め、回心した。罪の汚れを拭い去るために昼も夜も滂沱と涙を流した。どのようにして、どのような償いで至上の裁き人の怒りをなだめ、どのような行動で慈悲を得ようかと一人静かにずっと考え続けた。突然、この世のすべてを捨て去り、これから残りの人生を悔悛の行いをして過ごすことに決めた。しかし、彼には妻がいて、彼女の同意がなければそうできなかったので、自分の計画の秘密を妻に打ち明け、同じく行動するようになり返し求めて懇願した。妻は貴族の生まれ

で、心はさらに高貴だったので、夫の敬虔な誓いに喜んで同意した。それでも、敬虔な心に突き動かされ、涙を流し、子どもらのために懇願して父を説得した。息子と娘が一人ずついて、敬虔ゆえに母の心は子どもへの愛情で揺り動かされていたからである。しかし、用意周到な父は自分の世話を自分でするよう努める一方、子どもたちのためにもよく与えた。ブリノニアと呼ばれる女子修道院に多くの財産とともに母と娘を恭しく入れたからである。自分の息子はサン・ソヴールと呼ばれるロデーヴの修道院の修道士の集団に加えた。これは彼の最初の奉獻であり、三位一体に対して三つの悦ばしきものを捧げたのであった。

隣人や友人はみな一様に驚き、彼がなにをしたいのか、なにを準備しているのかと疑問に思った。みなが心の中で思い、あれこれ言う者もいたが、友人の一団が、なにを思い、なにをしようと考えているのか知りたくて、彼に親しく話しかけた。彼は自分の心の秘密と計画の目的を順序立てて彼らに語った。この機会をとらえて、世への蔑み、神の裁きへの恐れ、悔悛の報い、悪人の懲罰、そして祝福された者の喜びを説いたが、俗人ながらも言葉巧みで弁が立ち、見事に語り尽くした。彼の雄弁に興奮し、良心の呵責に耐えられなくなる者もあり、この世の高慢のすべてを捨て、直ちに悔い改めて回心した。その後もずっと彼のそばに在ることを望み、離れることのない仲間になることを約束し、生も死も行動をともにする覚悟をして右手を差し出した。こうした者の第一の者が今は亡きピレのレイモンで、その後、修道生活の中で抜きん出た存在になった。第二が司祭のギロー、第三が騎士のピエール・アルザラム、第四がロカギヨーム、第五がユーグ・ル・グラン、第六がエスパロンのギヨーム、第七が言葉と手本で彼らを回心させたボンヌ自身である。この数字のおかげで彼らが七つの恩寵で照らし出されたこと、完全数で始まるためにやがて回心と生活の完成に至ることが理解できた。

肉の愛の絆から解かれ、神が用意した仲間によって強くされ、彼はあの

福音の教えを引き受けた。そこで「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、私に従いなさい」（マタイ 19:21）と主は言われる。彼は告知して、すべての持ち物を買ひ手に提示した。すると、多くの者が、騎士も農民も、豊かな者も慎ましい者も、聖職者も俗人も、財布を持ち、それぞれ気に入ったものを買うことを望み、いたるところから一堂に会した。彼らの金が尽きた頃には、多くのものがすでに買われたが、まだ多くが買われずに残っていた。彼は購入者たちに対価について提案し、あらゆる種類の役畜や死すべき者の生命を支えるあらゆる土地の果実を対価として受け取ると述べた。彼はこうすることのある理由から望んだのだが、それは以下で明らかになるだろう。彼自身はなにをするつもりなのか知っていたのだから。

すべての不動産を売り払い、最大限の動産、つまり雄馬と雌馬、雄ラバと雌ラバ、雄牛と雌牛、羊や山羊やこのほか列挙すると冗長になってしまうほど多くの他のものを手にすることになった。主の命令に従って、困窮する者、教会、修道院、施療院と宿泊所、貧者と巡礼、寡婦と孤児にすべてのものを分け与えたいと願ったが、かつて暴力的に奪ったものをまず返さなければ神に受け入れられないだろうと考えた。だから、この地域のいたるところ、都市、城塞、村落に次々と、商売や市のために人が集まる場所はどこでも使者を送った。また教会じゅうに使者を送ったが、それはレラスのポンスがなにか借りがあったり、なにかを力で奪ったりしたすべての者が、枝の主日の祝日の後の月曜か火曜か水曜に、それぞれ自分のものを受け取りにペゲロールと呼ばれる村に自分に会いに来よう伝えるためであった。キリスト教徒の祝日である復活祭が近かったからである。

シュロの枝と呼ばれる主日が来て、自らの救いを配慮して、ロデーヴで宗教行列の後に福音書が読み上げられ、司教が聖職者らとともに広場で話すために設置された壇の上に立ち、民衆が囲んでいると、レラスのポンス

が上述した仲間と服をまとわず、裸足でやって来た。首には俗にレドルタと呼ばれる木製の鎖が巻かれ、誰かに犯罪者のように引かれていた。彼を引いていた者は鞭で激しく打ち続けたが、それは彼がそうするよう命じたからであった。善き主人から逃亡した農奴のように、司教のもとへ行き、司教の手を通じて自らを神に託し、跪いて許しを請うた。手に持っていた、自分のすべての罪を書かせた書簡を司教に渡し、すべての人の耳に届くところで読み上げられるように何度も懇願した。はじめ司教は彼が恥辱から免れるように断ったが、彼は執拗に懇願し続け、結局、そのようにした。こうして司教の同意を得て、書簡が読み上げられた。彼は打たれ、鞭打たれ続けたが、さらに激しく打たれなくてはならないと熱心に嘆願した。かくも多くの犯罪について自分は有罪であると声に出して告白し、涙で地面を濡らし、人々はみな感動して涙を流して泣いた。そこにいた者はみな感嘆し、熱狂的に彼を敬い、悔悛を褒め称え、主は本当に彼にご配慮なさったのだと誓って言った。さらに、悔悛の恵みをお与えになった方が善行を続けさせるようにと人々は彼のために祈った。こうした告白は告白した本人ばかりでなく、恥辱への恐れから長い間罪を隠してきた他の多くの人にとっても有益で必要なものであった。このように告白するのを見て、彼の手本に感動し、人々は悔悛と告白の沐浴へと殺到した。このようにされ、枝の主日の荘厳な儀式がしかるべく終わると、彼は教会へと赴いた。

翌日、つまり聖週間の二日目に、さらに三日目と四日目の祝日にも、上述した場所に多くの請求者がやって来た。多くの地方から集まったが、それぞれがかつて自分の失ったものを要求した。裁判人の前のように彼の前に集まり、彼のいるところで裁判を開き、裁判人に対するように彼に対して訴え、被告としての彼に関する証言を証人として彼に求めた。実際、彼は自身の原告・裁判人・被告・証人であり、このすべてを満たすことを望み、裁判のすべての役割を自らに引き受けた。自らを告発し、自らに対して証言を示し、裁判人のように自らを裁き、自ら被告として罰を受けた。

最後に、各人の足下に身を投じ、まず許しを請い、それから彼らの所有物から失われたものの量に従って各人に前述したものを返却した。上で述べたように、彼はさまざまな種類の多くの動物と人の使用に必要なすべての財を持っていたので、失ったものと同等のものを各人は受け取った。それゆえ、彼らは他人のものを受け取ったというよりも自分のものを見つけたと信じたのであり、かつての呪詛を祝福へと変えて別れの挨拶と祝福をし、喜びとともに自分の財産を取り戻したのであった。

そのとき、ある隣人の農民が近くに立っているのを見て「やあ、なにを待っているのか。あなたの訴えの理由を言ってくれないだろうか」と彼は言った。「我が主よ、私にはあなたに訴える理由がありません。私はあなたを大いに賞賛し、祝福しているのです。なぜなら、多くのことで私を助け、いくつかの訴訟で敵に対して私に保護を与えてくださったのですから。これまで私に危害を加えたことも損害を与えたこともありません」と男は言った。「とんでもない。私はあなたに危害を加えた。悪事をなし、損害を与えたのだ。しかし、あなたはおそらくそのことを知らないだろう。しかしかの夜のしかじかの時間に柵から家畜を失ったことはなかっただろうか」と男にポンスは言った。「失いました、我が主よ、確かに失いました。しかし、誰が私に損害を与えたのか知りませんでした。あなたが私の損害を知っていたことに気がませんでした」と男は言う。「私がやったのだ。すべて私の仲間と共犯者を通じて行ったことだ。だからお願いする、私を許してくれ。それからあなたから奪ったものを返そう」とポンスは言う。「天上の主があなたを許されんことを。というのも私は喜んであなたをお許ししますので」と男は言う。「残っている動物を受け取ってもらいたい。かつてあなたから失われたものの代わりになるように」とポンスは言う。こうして男は財を受け取り、それが天上から降ったのだと信じ、かつて彼に損害を与えた者は悪党ではなく、大きな贈り物を施した者だと喜びとともに宣言した。実際、ポンスは残っている自分の財産からすべてを困窮者た